フアヒネ島の自然

― フレンチポリネシア紀行 ―

北川芳男

昨年（一九七四）十月、ハワイのビショップ博物館人類学部門のスタッフとともに、フアヒネ島のポリネシア先史時代遺跡の地質学的調査をする機会にめぐまれた。

フアヒネ島は、世界的な観光地として知られているタヒチ島とともに、フランス領ポリネシアのソシエティ群島に属し、タヒチの北西約一六〇㎞の南太平洋上（西経一五一度、南緯一六、四五度）に位置している。日本から行くのは、いたって便利である。羽田を夜の八時、フランス航空のリマ行（週二回）で出発すると、赤道を越えてまもなく日付変更線を通過し、同日の昼ちかくタヒチのパピーテ空港に着く。時差が一九時間あるので、正味一一時間の空の旅である。パピーテからフアヒネ島までは、ポリネシア航空の定期便が毎日ある。

≪熱帯の雲≫

出発前、あまりにも日本的なつまらない用事に追われていたので、羽田を離れたとたんにすっかり疲れ、深い眠りについてしまった。どれほどの時間がたったのだろうか。ふと機外をみると、まさに登ろうとする太陽が無限につづく水平線上に赤く輝いていた。この美しい夜明けの太陽とともに、私の目を奪ったのは、朝焼けの空に浮かぶ雲の形態である。

私は、ときたま空の旅を楽しむ。眼下に陸地がみえるところでは、その地形や植生などを眺めるのが好きである。陸地ばかりではない。雲をみるのも楽しいことである。燦々と輝く太陽に照らされた雲海、台風のとき、その横を通って眺めた原爆雲状の異常な積乱雲など、飛行機でなければ楽しめない雲のいろいろである。ともあれ機窓からみえる熱帯洋上の雲は一風かわっている。大きな湖に点在する浮島のような雲、あるいは不連線上に発達した帯状の厚い雲、そのすべてが積乱性の雲である。高度は比較的低いが、どんな小さな雲の塊りからも、例外なく煙がたちのぼるように上にむかって巻き上がっているのである。なんにもみえない洋上ではあるが、こんな雲の姿が、私たちに、熱帯へ突入したことを知らせてくれるようである。雲、それも法則にかなった自然の産物なのである。

≪パピーテ≫

パピーテはフレンチ・ポリネシアの首府である。小規模だが垢ぬけした空港に降りたった。正午に近い。かなりの暑さを期待?したのだが、思ったほどではない。空港でタクシーを拾った。ワゴン型である。運転手は愛想よく助手台に席をすすめた。空港の広場には色とりどりの花が咲き乱れている。ホテルまで五㎞ぐらいだという。街に近づくと、ご多聞にもれず道路工事でごたついていた。こんな実態は、すでに空から眺めてがっかりしたことではあったが、南太平洋の楽園タヒチ島もこのパピーテ付近では、海岸から背後の山麓へむかって、宅地の造成や道路の建設が進み、赤い土の地肌が、かなりの面積にわたって、むきだされているのである。それは日本の都市周辺と同じ形相である。すくなくも、空からの眺ではそうみえたのだ。

パピーテは人口三万ほどの町である。海岸のメインス

トリートは、国際観光都市よろしく、新しい建物が並びポリネシア娘が黒髪をなびかせてスターターを走らせている。バスが気に入った。窓ガラスがない。ちょうどトラックの荷台を低くして、それに木枠をとりつけ、木製の長椅子を置いただけのものである。乗り降りは後からもできる。

パピーテは港まちである。豪華な観光船もやってきて海岸通りの岸壁に横づけされる。ちょっとみると、街のなかに巨大な船が陸揚げされたような錯覚をおぼえる。港はフランス海軍の基地をもかねている。しかし、一昨年、アテネのピラウス港で味わったアメリカ空母に象徴される無気味さは全くない。夕暮近くこの海岸を散歩していると、スマートな小型の漁船から水揚げされたカツオを、一匹、二匹と地元の人々が買ってゆく光景にぶつかる。そんな情景のなかに、楽園タヒチの面影を求めようとするのも一種の旅愁なのかも知れない。

≪ファヒネの地形と地質≫

飛行機がファヒネ空港に近づくと、眼下はヤシの密林である。こんなところに空港が……と思うまもなく、海岸に沿った滑走路に着陸していた。空港といっても、小さな管制塔とパンダナスの葉でふいた、日本式にいえば「あばらや」造りの待合室があるだけで、付属設備としては手動の消火器と荷物運搬用の小型車が配置されているほかは、これといったものはない。

出迎えてくれたビショップ博物館の篠遠博士とともにワゴンにのる。運転手はフランス系のおじいさんである。ほかに地元の男女が二人のっていた。車はヤシの樹林を切り開いた狭い道を走る。ヤシ以外に何もみえない。いったいどこへ行くのかなと、ちょっぴり不安になる。それには理由がある。たいてい調査に行く場合には地図を持っていく。しかし、ここファヒネの地図はどこにもなく、全く地理的概念も頭に画けないままやってきたからである。あとでわかったことだが、空港からファレ部落までは、わずか四kmしかなく、便乗したワゴンは乗合タクシーであった。いずれにしても、最初に出会ったヤシの樹林の道は、私にとって異常に長く感ずるものであった。

ファヒネ島は二つの島――ファヒネ・ヌイ（大島）とファヒネ・イチ（小島）――から成っている。二つの島は橋で結ばれ自由に行きできる。面積は二つの島を合せて、せいぜい一〇〇km^2ほどの小さな島である。南太平洋の孤島といいたいところだが、ファレの海岸からは、すぐ西隣のライアテア島、その北のタハア島さらにはボラボラ島などの島々が望まれ、孤島という感じはない。

ファレはこの島の西側に位置し、島の中心的な部落である。沖合のサンゴ礁を横切るアバモア水路からファレの谷に通ずる海底の溝、つまり自然にえぐられた深い水路を利用して造られた天然の良港である。週三回、客船と貨客船が交互に入港する。

この島は第三紀から第四紀にかけての火山活動によって形成された火山島であるため、海岸まで山地が迫り、平野部はすくない。そして、熱帯の激しい侵蝕作用によって堅い岩石だけが塔状に残され、きわめて異様な景観を呈している。この異様な地形とあいまって私の目を引いたのは、山道の切割りなどにみられる赤いレンガ様の土である。

島を構成する岩石は、南太平洋地域の特徴をよく示すアルカリ岩系の火山岩類で、カンラン石玄武岩、ハワイアイト、フォノライトなどが主なものであるが、赤色風化をはげしく受けているので、その原岩がなんであるかを判定するのにきわめて困難である。

じつは、このような粘土化の進んだ赤土こそ熱帯地域の自然に対応した土なのである。

≪サンゴ礁≫

タヒチやファヒネを含むソシエテイ群島のサンゴ礁は見事なものである。とくに、ファヒネからボラボラへの空の旅では、いやでもその美しさを満喫させられる。これらの諸島のサンゴ礁は、その形態から堡礁（barrier reef）とよばれるもので、ラグーンの水域をはさんで火山島をとりまくように生長している。サンゴ礁にはこのほか、島に直接、接して発達する裾礁（fringing reef）やビキニ環礁などで代表されるように、真中に島のない環礁（atroll）などがある。

サンゴ礁と島の間に形成されたラグーンは一般に水深は浅く（四〇mくらい）、複雑な海底地形をもっている。とくに、リーフの内側では、リーフの高まりを越えて流れこむ波浪によって、サンゴの礫や砂が運ばれ、水深がとくに浅くなったり、海底の地形が複雑化している。それに加え石灰藻などが繁茂しているため、リーフの内側、幅数百mの帯状の水域の水色は緑がかった乳白青色を呈し、紺碧の外洋や島に近い青いラグーンの水色と全く対称的なのが印象的である。この帯状水域は多量の堆

積物がたまるとやがて陸地化する。フアヒネ島では、東側から北側にかけてこのような陸地がリーフに接して、細長い島を作っている。この島を motu とよんでいる。とくに、北側から北西側にかけては、かつてのラグーンは埋めつくされ、火山島とサンゴ礁がつながってしまった。そして、埋めつくされない部分が湖として残っている。フアヒネの北側にあるマエバ湖はそのようにして形成されたものである。

こうしてできた陸地には、その形成をまっていたかのように、植生の侵入がはじまる。それはヤシとかマングローブのような水辺植物なのである。フアヒネをはじめタハア、ボラボラの motu の場合は、すべてヤシである。私がこの島で最初に出くわしたヤシの密林も、じつは motu に繁茂したヤシだったのである。また、フアヒネ空港もこの motu、正確にはサンゴ礁の上に造られたものであることに気がつく。たしかに、飛行場をサンゴ礁の上に造ることは合理的である。なぜなら、造礁性サンゴの形成は第三紀頃からはじまり、その厚さも数百米にも及んでおり、いってみれば石灰岩であるので極めて安定した地盤となっているからである。極端な話、ブルで表面を平坦にさえすれば立派な滑走路もできることになる。

サンゴ礁の自然で、多く人々の目を楽しませるものは透明度の高い水と海辺の白い砂である。海水がいかに透明であるかは、私の腕でも、地表から水深二〜三mの海底の姿を撮影できたという事実から、想像してもらいたい。また、海辺の白砂はサンゴや貝殻の細片で構成されている。この白砂は、北海道でよくみられる軽石質の白い火山灰に、きわめてよく似た感じのものである。

ヤシの緑と白砂、青く澄んだ水そしてその沖の印象的な水色とリーフにくだける白波、この美しさも、サンゴ礁の形成過程を示す重要な自然景観なのである。

≪気象—雨と侵蝕≫

タヒチを中心としたフレンチ・ポリネシアはきわめて快適な気候である。それは典型的な海洋性気候で、十二月から二月までが温暖で湿った夏季となり、三月から十一月までが、さわやかで乾いた季節にあたる。気温は夏季で摂氏二三〜三二度、冬季で一八〜二三度ときわめてしのぎやすい。私が滞在した十月では二〇〜二五度ぐらいで、夕方から夜にかけては肌寒さを感ずるほどであった。日中の烈しい太陽の下にあっても、湿度が低いので、いやらしい暑さは全く感じない。

フアヒネに着いてから三〜四日間は雨が多かった。もちろん一日中降るわけではない。夜半から朝にかけての雨が多かった。しかも、ただの雨ではない。いわゆるスコールというのだろうか。

まず、風が吹きはじめる。風が次第に強くなってきたかと思うと、ポッン、ポッンと大粒の水滴が屋根をたたく。やがて、その水滴の数が増し、もはや水滴ではなく、暗い天井から溢れだす滝のように、無数の水柱が地上になぐりつけられる。そして雨に打たれ、風に揺らぐ木々の間からは、うなり声にも似たものすごい音響が聞こえてくる。短いときで二〜三時間、長いときは四〜五時間はつづく。その後はからっと晴れるが、排水はよいと思われる砂地のところにさえも大きな水溜りができる。全く気まぐれな雨である。

こんなに強い雨現象と前に述べた奇怪な侵蝕地形を結びつけて考えてみると、熱帯地域の侵蝕作用の激しさ想像できるような気もするが、私なりに一つの疑問をいだくのである。それは、これだけの激しい侵蝕をうけているのにもかかわらず、削りとられた岩屑の行方がわからないということである。どこへ姿を消したのだろうか。ラグーンの底質を徹底的に調べたわけでもないが、少なくも motu を構成する堆積物の大部分は、外洋から運ばれたと考えられるサンゴや貝殻片の砂であり、島から洗い出されたと思われる堆積物はほとんどない。

侵蝕と堆積の問題、そして、それに関連する古気候の変遷、そんななかに、堡礁をもつ島の生成的な問題が隠されているのかもしれない。

≪海と人と生物≫

フレンチ・ポリネシアの島々に何時頃から人間が渡ってきたのだろうか。フアヒネ島の遺跡の14C年代からみると、それは九世紀の中頃と推定される。しかし、ポリネシア文化の発祥とその伝播経路については、いまなお多くの問題が残されている。それはさておき、ポリネシア文化圏といわれる地域は、このソシエティ群島をほぼ中心にして、南西はニュージーランド、北はハワイ諸島、東南はイースター島を結ぶ南太平洋から中部太平洋にかけての広大な三角形の海域がふくまれている。その広さは、ヨーロッパ大陸にも相当するといわれる。そしてポリネシア文化はこの海域に浮かぶ島々を舞台に、西のフィジー島を起点として、三、五〇〇年前の昔から、小さ

なカヌーを武器として西から東のマルケサス群島へ、そして北のハワイと南西のソシエィ群島からニュージランドへ、さらには東のイースター島へ拡がっていったといわれている。そして、そこには太平洋を征覇した雄大なポリネシア人の夢と生活が秘められているのである。フアヒネの発掘調査も、じつは、このようなポリネシアの先史を掘りだすための一過程なのである。発掘された住居址や一本のカヌーのオールは、いったい何を語ってくれるのであろう。

時代は下るが、ポリネシアの島々には十五～六世紀につくられた石を積み重ねた住居址や野外寺院、あるいは石像などが残されている。フアヒネにおいても北のマエバ湖畔や南端のマヲエなどに野外寺院跡が見事に残されている。おそらく、この寺院を中心に一つの集落が形成されていたのであろう。その家々は海辺から水面に張りだすような高床式で、パンダナスの葉でふいた楕円形ないし長方形のものであった。十八世紀のなかばを過ぎて、ヨーロッパ人がはじめてこれらの島々に足を止めた時には、まだそのような情景をみることができたにちがいない。

「戦艦バウンティ号の叛乱」の映画でもないが、南太平洋のタヒチを特徴づける植物としてパンの木（Bread-fruit tree〈Artocarpus altilis〉）がある。それらと交換でヨーロッパから運ばれてきたのが豚である。フアヒネ島には家で飼われる犬をのぞきこれといった哺乳動物はいない。しかし、マエバ湖畔のヤシの樹林におおわれた湿地帯を歩いていると、野性の豚によく出会う。この豚こそ中世から現代へ生きつづけたヨーロッパ豚にちがいない。白豚より黒や白黒の斑点模様の豚が多い。まさに動物の楽園なのかも知れない。海の幸も豊富である。

夕方、フアレの波止場で夕闇にけむるライアテアやタハアの島々を眺めていると、波一つない静かな海面からパチャ、パチャという音が聞こえてくる。みると、トビウオの群である。傍若無人というよりは、暗くなりかけた海面をわが家の庭で遊んでいるように、右へ、そして左へと群をなしてとびはねているのである。これでわかった！　こんな岸辺に網が張ってあることが。やがて、現地のポリネシア人とフアヒネで生まれ育ったという中国人の男がカヌーにのり、見事なオールさばきでトビウオの群を追う。そして、網に追こむのである。

夜の扉がおりるすこし前である。忘れかけていた自然の静けさと人と自然の対話の妙味を存分に味わうことができたのである。

フアヒネ島にかぎらず、ソシエティ群島の島々には、これといって農作物はない。あるのは、ヤシの樹林を開いてつくったわずかの土地で栽培するスイカやタロイモぐらいである。ヤシの実はそのまま移出するものと、殻の内壁についている脂肪にくを日影ぼしにしたコプラとして移出するものとがある。そのほかは、バナナなどが旅人を楽しませてくれる有用植物であろう。それよりも私たちの目に印象的に焼きつくのは、赤、黄、オレンジ、青、そして白など色とりどりに咲き乱れる可憐な花である。なかでも赤く大きなハイビスカスやポリネシア娘の髪を飾る可憐な白い花のルデンニアなど忘れることのできないものである。

≪エピローグ≫

タヒチ島の自然――すくなくも島をめぐる道路の周辺――は、すでに整理された美しさである。しかし、フアヒネのそれは、まだまだ昔ながらの自然が残されている。ただ、驚いたことは、島のすべての部落の家々が、ほとんど新しいタイプの住宅になっていたことである。昔ながらのパンダナスぶきの小屋は、探すのに骨が押れるくらいである。そして皮肉にも、昔の面影をとどめた建物の密集は、観光を当てこんだホテルの建物である。観光開発の波は、もはやタヒチだけではなく、ソシエティ群島のすべての島に押し寄せている。なかでも最近のボラボラは激しい。その点、フアヒネはまだよい方である。しかし今回の発掘地点が、昨年オープンしたバリハイ・ホテルの敷地内であり、遺跡の一部はその庭に作られた池や建物の建築によって破壊されていた事実こそ、この旅で一番悲しいことであった。

フアヒネの人々は底抜けに明るい。そして、お人好である。けれどもタヒチやボラボラになると多少のちがいを感じる。なぜだろう。それは、自然と人間のかかわり合い、つまり「自然との対話」のちがいにあるのではないだろうか。自然に対する人間の働きかけ、それはよい意味でも悪い意味でも、人間自体をも変えてゆく。

「自然との対話」などといっても、日本では、もう、「ナンセンス！」という返答しか返ってこなかもしれない。けれども忘れ去られたこの「対話」こそ、自然を守る原点ではないだろうか。

（北海道開拓記念館）